

1 寿式三番叟

登場人物

千歳鶴 千歳亀 中の太夫 (翁) 面箱持ち

幕開け祝詞 ソーレ 豊秋津州(しま)の大日本、国常立の尊(みこと)より、天津神(あまつかみ)七世(ななせ)の後、地神(ちかみ)の始め、天照大神(あまてらすおおかみ)

(面箱持登場)

岩戸に籠(こも)もらせ給いしとき、世は常闇(とこやみ)と 成りけらし、式さんばのそのいわれ、おさおさ申すも恐れあり、天下泰平、国土安穩(あんおん)千秋万歳、慶びの舞なれば、一さし舞おう万歳楽、万歳楽

(面箱持ち座る)

(鶴・中の太夫〈翁〉・亀が登場し、礼をして座る)

どうどうたたり、どうたたり、鶴と亀との齡お会(え) 幸いここにまかせけり

翁 参籠(さんろう) 連々(れんれい) とんろうや
(中の太夫〈翁〉の舞)

長 唄 千代のためしの数々に なにを引かまし姫こまつ 齡(よわい)にたぐう丹頂の
鶴も 羽そでをたおやかに 千代をかさねて舞いあそぶ <合いの手>
山河草木、国土豊かに千代よろずよと舞いたまえば、勸進(かんじん)かよ帳
みこしを早め 君の齡(よわい)の長生殿(ちょうせいでん)に 君の齡の長
生殿に 関与(かんよ)なるこそめでたけれ

(中の太夫座る。面箱持ちの舞)

面箱持ち 合(お)うさいや 合(お)うさいや
面箱持ち 喜びありや、喜びありや
面箱持ち 我が思うこの所より
面箱持ち ほかへはやらじと、御(おん)申す

(面箱持ちの舞)

長 唄 にせむらさきの中々に、及ばぬ筆のうつしえに
(ヨーイヤ・・・三味線)
池の賑わの鶴亀や、ホンニ鶴のまねからす飛び
(合いの手・三味線・面箱持ちの長い踊り)
とっば千鳥のありがたや、花の御当地の御ヒイキを
かしらに高き タテ烏帽子

(舞い終わり全員が座ると、セリフが飛び交う)

鶴 中の太夫殿に一寸(ちよっと)見(げ)んぞうを申す
中の太夫 ちよと参って候(そうろう)
亀 互(たご)う立ちにて候(そうろう)
中の太夫 あととり候ほどに、ずいぶん物を心得たる

鶴
 中の太夫 自（みずか）らお後の役に、まかり立って候
 されば候
 まず今日（こんにち）の三番叟、天下泰平（たいへい）所（ところ）も富貴（ふうき）繁昌（はんじょう）と舞い納めること 何よりもって安う、目出とう参って候
 鶴
 中の太夫 まず、中の太夫殿には設（もう）けの席にお直り候え
 いやいや、まず尉（じょう）殿の舞いを、ひとさし見申した後、席に直ろうずるにて候
 亀
 中の太夫 お直りなくては舞い候まじ
 おん舞い候え
 鶴・亀 お直り候え
 中の太夫 おん舞い候え
 鶴・亀 ただただ、お直り候え
 中の太夫 あーら言うがましや。さらばめでたき鈴を
 （面箱持ちが鈴を持ってきて、中の太夫に渡す）
 中の太夫 舞いらそう
 （中の太夫は鶴・亀に鈴を渡す）
 鶴・亀 こうそう
 （中の太夫退場）
 （鶴・亀が鈴を持ち、笑いを誘うアドリブを入れながら舞う）

（最後に、全員の「後さんば」で締める）

浄瑠璃柳 はみどり、花はくれない
 数々の浜の真砂はつきるとも
 つきせぬ御世の神々の
 おさまる御世こそ、めでたけれ

（幕）

*「面箱持ち」が居ないとき、鶴と亀が代わってその役をつとめることがあります。正式には真ん中に翁を入れますが、構成は時間や人数によって変更されます。

2 義経千本櫓 吉野



左 竹本粹龍太夫 右 豊沢賀祝太夫

山・道行きの場合

登場人物

佐藤忠信（実は源九郎狐） 早見の藤太 静御前 家来（数名）

浄瑠璃 <（静の舞）谷の鶯 初音の鼓 初音の鼓 調べあやなす音に連れて招くさ
（ヨオーイ ハアー・・・ 三味線・・・）
遅ればせなる忠信が！（ここで忠信登場）背なに風呂敷をしっかりと背た
るおて 野道あぜ道ゆらりゆらり 軽い取りなし いそいそと>

忠 信 静さまにはおはやきおみあし、女の足と侮って、思わぬ遅参。
真っ平ご赦免下さりませー

静 待ちかねました忠信殿。わが君様、この吉野におわするよし。早うおちこち人に、
会わしたもー。

忠 信 ハハアー。仰せのとおりわが君・義経公には、この吉野とうけ賜れば、おっつ
けお会わせつかまつらん。

静 春立つと、言うばかりにや、み吉野の

忠 信 山もかすみて

静 けさは

静・忠信 見ゆらん。

忠 信 静さま、ここ幸いの人目なし。

浄瑠璃 <姓名添えて賜りし、御着せ長を取りいだし、君と敬い奉る。（三味線）
静は鼓に御顔よそえて上に 沖の石 人こそしらね西国へ 御下向の御海上 波
風荒く御船を（合いの手）住吉浦に吹き上げられ、それより吉野にまします由
やがてぞ参りそうらわんと 互いに形見をとり納め げにこの鎧を賜りしも 兄
継信が（ハアー・合いの手）忠勤なり誠にそれよ来し方の 思いぞいずる壇ノ
浦の 段の浦のー>

忠 信 沖に兵船、平家の赤旗、くがに、白旗一。

浄瑠璃 <源氏のつわもの（三味線・忠信早変わり）あらものものしやと 夕日影 な
ぎなた引きそばめ なにがしは平家の侍 悪七兵衛景清と名乗りかけ名乗りか
けなきたつれば 花に嵐の散り散りぱっと 未の葉武者いいがいなしとや方々や
三保の谷の四郎これにありと 渚にちょうど打ってかかる 刀を払うなぎなた
の えなれぬ振る舞い いずれとも（三味線）まさにおどりはあらポンポン 波
の音 打ちおう太刀のつば元より 折れて引く汐 帰る雁。（合いの手・忠信
の踊り）勝負の花をみすつるかど なぎなた小脇にかい込んで 兜のしころを
引っつかみ あとへ引く足たじたじたじ 向こうへ行く足よろよろよろ むんず
しころをひききって 双方しりえにどっかと座す（合いの手）腕の強さといひけ
れば 首の骨こそ強けれど ワッハハハハハ オッホホホホ 笑いし跡は入り乱
れ 手しげき働き 兄継信が 君のお馬の矢おもてに 駒をかけすえ立ちふさ
がった（合いの手）オオ 聞き及ぶその時に平家のかたにも名高き強者 能登の
守教経と名乗りもあえずよっ引いて 放つ矢先はうらめしや 兄継信が胸板に
たまりもあえず真っ逆さま。（三味線）あえなき最期はものものふの 忠臣義士の
名を残す 思いいずるも涙にて 袖は乾かぬ筒井づつ>

藤 太 （花道の奥から声） やーれこいやー。

家来一同 オオー。

忠 信 静様にはあれなる木陰に、まず まーず。
（子ども歌舞伎では浄瑠璃を一部飛ばし、テンポをはやめる）

藤 太 やれこいやー。
家来一同 オオー。(藤太たち登場)
藤 太 時に家来共、この度静御前に初音の鼓、奪いとったるその時は、莫大なるごほうびにあずかる。その時は汝(なんじ)らそれぞれに分けてつかわす。こりゃその方、酒はどうじゃ どうじゃ。
家来1 酒は大の大的嫌いでござりまする。
藤 太 なに? 酒は嫌いか。しからばその方、饅頭はどうじゃどうじゃ。
家来2 饅頭など、甘いものは大の大的嫌いでござりまする。
藤 太 なに、饅頭も嫌いか。ウン、しからばこれこれその方、団子は どうじゃ どうじゃ。
家 来 団子のようなまるいものは、大の大的嫌いでござりまする。
藤 太 なになに、団子も嫌いか。しからばその方、うどんはどうじゃ どうじゃ。
家来4 うどんのようなツルツルするものは、大の大的大的嫌いでござりまする。
藤 太 うどんはツルツルするゆえ嫌いとな。酒は嫌い、まんじゅうは嫌い、団子は嫌い 嫌い嫌い嫌い嫌い共やーい。
家来一同 ハハー。
藤 太 時はさんこうねの時刻。
家来一同 ネ。
藤 太 ずいぶん腹が減ってきた。
家来一同 ネ。
藤 太 どこぞそこらに茶屋あれば。
家来一同 ネ。
藤 太 酒の2, 3升も炊かせておいて。
家来一同 ネ。
藤 太 飯の5, 6升も爛させて。
家来一同 ネ。
藤 太 あとは食い逃げ、合点か。
家来一同 かしこまってござりまする。
藤 太 かしこまったら、まゆげまゆげ。
家来一同 ハハー。
浄瑠璃 <ヨーイ、そこで早めの藤太が立ち止まり>
藤 太 待て。
家来一同 ネ。(待て・ネ、待て・ネ、を繰り返す)
藤 太 待て待て待て待て、家来共やーい。
家来一同 ハハー。
藤 太 義経公のお側には、亀井・片岡・伊勢・駿河。おまけにずんべらほんの坊主弁慶。こいつおれよりちょっと強い。おれはよっぼど・・・
家来2 どうでござりまするか。
藤 太 トホー、弱いもの。
家来3 情けないお旦那様ですなー。
藤 太 必ずぬかるな合点か。
家来一同 かしこまってござりまする。
藤 太 かしこまったら、へそげへそげ。
家来一同 ハハー。
浄瑠璃 <ヨーイ ハアー ここで早目の藤太がまた止まり>
藤 太 待て、待て、待て、・・・(繰り返し)
家来一同 ネ、ネ、ネ、・・・(繰り返し)
藤 太 待て待て待て待て、家来共やーい。
家来一同 ハハー。
藤 太 総じて戦というものは、大敵たりとも怖るるな。小敵たりとも侮るるな

弱いと見たならどっと寄せ、強いと見たなら・・・かくゆう拙者を先に、つ一つと逃がせよ、合点か。

家来1 も一しも一し 旦那様。あなたのようにそのように、

家来2 行きつ戻りつなされては、

家来3 ねっから道がはかどらぬ。そこで我らが先にたち、

家来4 おいさめ申すが、

家来1 合点か。

藤 太 かしこまってすわります。

家来一同 かしこまったら、まいれまいれ。

藤 太 ハハハ・・・コリヤ・コリヤ・コリヤ・コリヤ、待て待て待て・・・。ただ今聞いておれば、主人を後に残し、家来のぶんざいで参れ参れとは何事じゃ。それに直れ。真っ二つにしてくれるわ。

家来一同 ハハハ、お助けお助け。

藤 太 と、申すところなれど、本日はほかならず、○○○○○じゃ。

(○○○は、アドリブで当日のイベント名などを言う)

特別にさし許す。その方たちの命が助かったのも、ここに居られる皆様方のおかげじゃ。さあ皆でお礼を申そう。皆様・・・

一 同 ありがとうございます。

藤 太 その方たちとごちゃごちゃと申しておったが、ここは吉野山。

この吉野に静・忠信がおるとの訴え。くんくん、匂う匂う。誰か物見に行け。

家 来 ハハハ、かしこまってございます。

藤 太 待て待て、物見はよいが静御前のそばには、佐藤忠信と申して、ことのほか強いやつがおるゆえ、もしそやつを見つけたら、拙者の耳元にて、小さい声で「忠信がおりました」と申せよ。よいか わかったか。

家来1 ハハハ、いさい承知。

藤 太 行け行け。

(家来はあちこち探して、静を見つける)

家来1 お旦那様お旦那様。

藤 太 おったか。

家来1 おりました、おりました。それはそれは美しい、静御前がおりました。

藤 太 なに、静御前がおるとな。そうかそうか、してして忠信の姿は。

家来1 忠信らしきものはいっこうに。

藤 太 なに、忠信はおらず静一人とな。

家来1 ハハハ。

藤 太 左様か左様か。しからば拙者が見てまいる。

藤 太 この辺りか。

家来1 もう少し、もう少し(もう少しを繰り返す)

藤 太 この辺りか。(アドリブで探す仕草をいろいろ行う)

家来1 ハハハ。

藤 太 オー、美しい。あなたが静さま。ハハーン、いかさま義経殿の思いしお方。

お美しいの..

家来1 左様でございます。

藤 太 ウンウン、あのような美しいものは何べん見てもよいものじゃ。

今一度見てまいる。

(浮き浮きしながら近寄って行くが、静と忠信が入れ替わっている)

藤 太 タ、タ、タ、忠信じゃ。

家来一同 お旦那様、逃げましょう。

家来1 お旦那様お旦那様。

藤 太 な、な、何じゃ。

家来 | お旦那様の足が震えてござりますが・・・
 藤太 | なに、震えておる？
 家来 | ぶるぶると震えております。
 藤太 | 黙れ、これは決して震えているのではない。これは・・・
 家来一同 | それは・・・
 藤太 | これは・・・
 家来一同 | それは・・・
 藤太 | これは・・・戦場においての武者震いと申すものじゃ。な一んの忠信の1匹や2匹。この早見の藤太が大音声にて呼ばわってくれるわ。
 藤太 | やあやあ、忠信。
 静御前に初音の鼓、奪いとらんと来てみれば、源氏車が居合わせて、飛んで火車風車、人力車に身を乗せて、どぞ御所車とぬかしても、その手は食わぬ口車。初の手柄に初音の鼓、調べ結んで胴かけて、手の内しめて肩に当て、尻からスッポン、スッポンポン。スポスポ、スッポンポン。忠信、返事は・・・拙者の名は藤太、藤太。
 浄瑠璃 <藤太藤太と 呼ばれたり>
 (忠信ぶっと噴き出し)
 忠信 よいところへ、早見の藤太一。 わがおんともなせし、静御前に初音の鼓。奪いとらんなんぞとは、胴よりふとき面の皮、いでふみやぶって、かっかっかくれべーか。
 浄瑠璃 <大手を広げて待ちかけたり>
 藤太 | それ行けー (合いの手)
 藤太・家来 | 忠信やらぬ
 浄瑠璃 <桜桜と、言う名にほれて>
 一同 | どっこいやらぬ
 浄瑠璃 <しよせんお手には 入らぬが花よ そりゃこそ見たおかりそれでは行かぬと入らぬかなあー>
 (藤太たちは徐々に忠信に狐にされていく)
 忠信 | 静さまには、少しも早う。まずまーず。
 浄瑠璃 <急ぐとすれど はかどらず 芦原峠この里土田むつ田も遣らぬ、のじの春風吹きはらふ、雲とみまごうみ吉野の麓をさして急ぎ行く>
 (静、退場。忠信は狐の衣装に早変わりをし、六法を踏む。<名場面>最後に藤太たちを完全に打ち負かして幕となる)

(幕)

平成3年12月28日
 子ども歌舞伎のため作成
 監修 嵐獅山・中村和歌若



中町北小学校歌舞伎クラブ

4 傾城阿波鳴門 どんどら大師の場

登場人物

お弓（おつるの母） おつる（巡礼） 妙天（尼）

妙珍（尼） 右近（狂言師・男） 左近（狂言師・女）

- 右 近 左近さん、今日は月に一度のお大師さんの祭礼、しっかり稼ぎましょうな。
左 近 ええ、ご鼻屑のみなさまに喜んでいただけるような踊りをお見せいたしましょう。
右 近 そうじゃとも。それじゃ左近さん。
左 近 右近さん
右 近 少しも早う参りましょ
(右近・左近、舞台中央まで出てくる)
右 近 左近さん、まだ参詣の人も少ないようやし、しばらくここで休みましょかいの。
左 近 あいなあ。
(妙天・妙珍、出てくる)
妙 珍 妙天さーん、妙天さーん、妙天さん妙天さん妙天さん・・・ちょっと待ってえな、
妙天さん妙天さん。
妙 天 なんじゃなあ、待て待て言うて。あんたもう少し速う歩けんのんかいな。
妙 珍 なに言うていますのや。あんたの足が速いのや。もうしんどうてしんどうて・・・
妙 天 ごちゃごちゃ言わんと、さあ、早う行きましょ行きましょ。
妙 珍 妙天さん、この茶店でブブ飲ましてえな。
妙 天 困ったお人やな。しかたがないわ、ホナそないしましょ。
妙 珍 おおきにおおきに。(お茶を飲む) あ、これでやっと思がついたわ。
ああ、おいしかった。
妙 珍 おお、右近さん左近さん、お二人おそろいで・・・ア、わかった、今日はお大師
さんのご命日。人出をあてこんでのご商売。結構なことで。
左 近 イエイエ、わたしどものような未熟者は・・・
妙 天 とんでもない、ご立派なもので。がんばっとくんははれや。
左 近 おおきに
妙 珍 (大きな声で) 妙天さん!
妙 天 なんじゃな、びっくりするがな。
妙 珍 ウチ、えらいことしてしもうた。
妙 天 なにがいな。
妙 珍 じつはな、ゆうべ、ソレソレ、おまえも知ってのお弓さんに会ってな。明日、お
大師さんのご命日ゆえ、ご一緒しましょか。ワテが必ず迎えに行きますと、かた
い約束したのに、すっかり忘れてしもうたがな。
妙 天 なんじゃ、お弓さんを忘れた。そりゃまた偉い人をわすれたなあ。
妙珍さん、あの人、おさむらいさんのお内儀さんやで。そんな人を忘れるやなん
て・・・あんた、えらいことしたなあ。
妙 珍 どないしよう。
妙 天 どないもこないも、おまえんやないかいな。一体どないする? えらいことやで
アンタ。首がまえに「コロリ」・・・知らんで知らんで知らんで。
やなんて・・・あんた、えらいことしたなあ。
ア、妙珍さん、ウワサをすればかげとやら。アレアレ、向こうから来やはるのは、
お弓さんどちがうか。
妙 珍 ア、お弓さんや。ドウショウ、ドウショウ (と歩き回る)。

妙 天 アアア・・・妙珍さん。そうあわてんと、ワテにまかしなはれ。わたしがあんじょう言うたげるよって、あんた、あの茶店の中に隠れてなはれ。そして私が出てきい言うまでは、出たきたらあきまへんで。ワカッタナ、ワカッタナ。
(妙珍、茶店にかくれる)

妙 天 しかしお弓さん来やはったら、どない言おうかいな。こりゃまあ、ひょんなことを頼まれたなあ。
<三味線> (お弓出てくる)

妙 天 チョッ(右手で) チョッ(左手で) チョッ(右手で)

お 弓 オオ、これはこれは、だれかと思えば妙天さんじゃないかいな。

妙 天 やっぱりお弓さん。ようにてはる人やなあと思うていましたんやけど、やっぱりお大師さんにおまいりに。

お 弓 アイナア。“

妙 天 そーですか。それでお一人で。

お 弓 オ、ソウソウ、そのことであなたに聞いてもらいたいことがありますのや。じつはなあ、ゆうべ妙珍さんに会いましてな。「あしたお大師さんのご命日ゆえ、ごいしょにお参りしましょうか」と言われましてな。「ではごいっしょに」と申しますと「迎えに行くゆえ、かならず待っていてくださんせ」と言われ、待てどくらせとお見えにならず、こりやてつきりだましたと腹を立てて、お参りに来ましたワイナア。

妙 天 え！ そんならお弓さん、あの妙珍と約束？ そりゃあかんわ！ お弓さんも、人見て約束しなはれ。アンタ、妙珍なんかと約束するちゅうことがありますかいな。あの妙珍は「ウソツキの妙珍」ゆうて、とおってますのやで。嘘つきは泥棒のはじまりということがありますやろ。あの妙珍は、ひょつとすると・・・(あたりを見回しながら)泥棒かもしれまへんで。

お 弓 マア、そんなお人とは見えまへんけどなあ。

妙 天 マアマア、お弓さんも人のよい。氣いつけなあきまへんで。
<拍子木に合わせ、怒った顔で妙珍が出てくる>
(妙天のむなぐらをつかんで、怒った大きな声で)

妙 珍 妙天さん妙天さん、アンタ、言うてええことと悪いことがあります。いつ、私がウソつきました。いつ物を盗りました。いつ、泥棒しましたんやねん！

妙 天 マアー、マアー、マアー。それもこれも話しのはずみで・・・。

妙 珍 なにが話しのはずみじゃい！ ヨウまあ、このうそつきめ！(頭をたたく)

妙 天 アイタ・・・あんた口で言うたら、口で返しなはれ。何も、手を使うことおまへんやないかいな。そんなら・・・(頭をたたく)

妙 珍 アイタタ・・・やったな。
(二人はつかみあいのけんかになる)
(右近、左近、出てきて止めに入る)

お 弓 マアマア、お二人。このような人通りの多いところで、尼さん同士の争いは、みっともよいものではござんせん。まあまあ、この場は私にめんじて仲良ようしてくだしやんせ。

妙 珍 お弓さん、けさはすっかり忘れてしもうて・・・。お誘いすると言いながら、エライすみません。堪忍しておくれやす。

お 弓 なんのいな 妙珍さん。私はもう何とも思っておりませぬゆえ、これから先も仲良うに・・・

妙 珍 おおきに・・・

妙 天 妙珍さん、私が悪かった。つい口が滑って・・・。堪忍してな。

妙 珍 何の何の、もとを言えば、私がお弓さん忘れたのがいかなのや。あんたにもえらい迷惑かけましたなあ。

右近 出来ました出来ました お二人さん。これから先も仲良うに・・・

左 近 互いを結ぶ 舞ひとつ

妙天・妙珍 ヨウヨウ（と、拍手する）
 （右近・左近 鶴亀おどり）
 （妙天、妙珍、お弓が拍手する）
 妙 天 けっこうでござります。いつ見てもお二人さん、踊りは立派なものですな。
 妙 天 なあ、お弓さん
 お 弓 けっこうでござります。これで私も、気が晴れました。お二人さん、少のうござんすが、私の気持ち・・・（と、紙に包んで渡す）
 右 近 これはこれは。誠にありがとうございます。ポチポチ、境内も賑やかになってまいりましたゆえ、私共はこれで・・・
 妙 珍 そうかいなそうかいな。それではお二人さん、おきばりやす。
 右 近 ハイ ありがとうございます。それでは お三人さま ごめんなされてくださりませ。
 （右近・左近、退場）
 妙 天 よかったよかった。これでなにかもスーとしましたな。
 妙 珍 わたしもスーとしました。妙天さん、スーとしたひょうしにおなかのほうもスーとしました。妙天さん、お弁しましょうか。
 妙 天 マア この人は・・・。まだ お昼まではだいぶんありませ。そんなはよからお弁したら・・・というところやけど、食べましょか。お弓さん、わたしら ここでお弁しますが、お弓さんは・・・。
 お 弓 アイ、わたしはなあ、今しがた向こうの茶店で軽くすましてきましたゆえお二人さん、どうぞご遠慮なく。
 妙 天 さよか。そんなら妙珍さん、いただきますよか。
 妙 珍 そうしましょう。わもし茶店でゴザかつてきますわ。
 （ゴザを借りてきて・・・）
 サアサア ここへひきましょか。
 妙 天 そこはやめなはれ。それぞれ、そこに水たまり。
 妙 珍 そうやなあ、ホナ、ここにしようか。
 妙 天 妙珍さん、よう見てみなはれ。そこは馬のふんがあるやないかいな。
 妙 珍 ここやここや。ここなら眺めもよし、ここでいただきますよ。
 妙 珍 ドッコイショ。 こんな眺めのよいところで食べるお弁て、おいしゅうおすな。
 （弁当を食べながら、口をもぐもぐさせ・・・）
 妙 天 ところでなあ、妙天さん。アンタ、この浪花の土地のことは、なかなか詳しいんでつしゃろ。
 妙 珍 そらまあなあ、長いこと住んでるさかい、詳しいといえば詳しいけど。
 妙 天 そんならたずねるけど、アノ、むこうの方にズーとながれる川、あれは何という川やの。
 妙 天 ドレドレ、あれかいな。あれはなあ、有名な淀川ゆうのやないかいな。
 妙 珍 ア、ソーカー、あれが淀川かいな。ソ、ソ、ソ・・・そんなら こっちの高い塔は・・・。
 妙 天 ドレドレ、あれかいな。あれはなあ、有名な天王寺さんの五重塔やないかいな。
 妙 珍 ア、そう。そんなら、こっちは・・・イヤイヤ、あっちのあれは・・・イヤイヤ、向こうのあれは・・・妙天さん 妙天さん 妙天さん
 （妙天、びっくりして、握り飯を喉につめる）
 妙 珍 アレ 妙天さんが目をむいている。妙天さん 妙天さん 妙天さん！
 お弓さん、妙天さんが 妙天さんが 妙天さんが・・・
 （お弓、妙天にお茶を飲ます）
 お 弓 妙天さん、しっかりしなはれ。
 妙 珍 妙天さーん 妙天さーん 妙天さーん
 妙 天 オーキニ、オーキニ、オーキニ お弓さん。すんまへなんだなあ。妙珍さん！ アンタがアッチコッチ言うさかい、それに答えようとした拍子にお握り

が喉につまって もう少しで死ぬところやないかいな！ お握りと心中するところでしたなあ。

浄瑠璃

<年はようようと 道にかけたるお
いずるに同行二人とするせしは ひと
りは大 師の かげたのむ>

おつる

巡礼に、ごほうしゃー（高い声で
一本調子で）

浄瑠璃

<言うもやさしき 国なまり>

妙 珍

（大声で）そおれッ、出た！

妙 天

妙珍さん、出た出たて、何が出ましたんや

妙 珍

か、か、かみなりの子が出ましたんや。

妙 天

なんじゃ、かみなりの子？

妙 珍

それぞれ・・・そこにタイコとバチもって立ってまっしやろ。

妙 天

ドレドレドレ、かみなりの子ゆうて？・・・なあんじゃいなあ、かわいらしい巡礼の子やないかいな。 マアマア・・・ホホホ・・・タイコとバチやなんて、笠と杖やないかいな。妙珍さん、見てみなはれ。

妙 珍

アレ、マア、ホンマヤ。かわいらしい巡礼さんやないかいな。

妙天さん、お大師さんのご命日に、この子と出会うのも何かの縁、報謝（ほうしや）しましょうか？

妙 天

ソヤソヤ。そりゃあ、ええことやないか。

妙 珍

そんなら、もしもし、ご報謝いたしましょう。

おつる

ありがとうございます。

妙 珍

いいえ、妙天さん、あんたも報謝しなはれ。

妙 天

分かってますがな。わたしらな、あんたみたいなケチなことしまへんで。

サアサア、ご報謝しんぜましょう。

おつる

ありがとうございます。

妙 天

いいえ、どういたしまして。 妙珍さん、アンター体、なんぼしたんや？

ワテかいな、ワテな・・・一文。

妙 珍

アーキタナ、一文くらい。それでや、あんたの時は声が小さい（小声で）

妙 天

「ありがとうございます」 あたしがドーンとほうしゃしたら（大きな声で）「ありがとうございます」と声がちがうがな。

妙 珍

それで アンタ、一体なんぼしなはったんや。

妙 天

ワテかいな。ワテはなあ、清水の舞台から飛び降りたつもりで・・・一文

妙 珍

ナンヤ、それやったら、ワテとチョボチョボやないかいな。

妙 天

モシ、お弓さん。あそこにかわいらしい巡礼さんが来てますねやけど・・・

お 弓

ホんにマア、かわいらしい巡礼の子。ドレドレおばも報謝いたしましょう

おつる

ありがとうございます。

お 弓

見れば見るほどかわいらしい子ですなあ。

妙 天

そうですやろ。ところでなあ、妙珍さん。この子どもから来たのやろなあ。

妙 珍

そうですな、ちょっと聞いてみましょうか。

コレコレ、そこな子。そなた、国はどこじやえ？

おつる

アーイー、国は阿波の徳島でござりまする。

妙 珍

阿波の徳島？ ソーカ、阿波の徳島、阿波の徳島・・・

妙 天

妙珍さん、あんた、よう知ってるように言うてるけど、阿波の徳島ゆう所知ってるんかいな。

妙 珍

知りまへんっ。せやけど、遠いところでっしゃろ。



どんどろ大師 (大阪空堀町)

妙天 そんな遠いところから、この浪花まで来るといことは、さぞかし親ごさんといっ
 しょに西国するのであるうな？
 おつる イエイエ、そのとどさんや、かかさんに会いたさゆえ、西国するのでござりまする。
 妙 珍 (大声で) なんじゃ？ ソナター人、とどさんやかかさんを尋ねて西国す
 るとは、そりやまた どうした訳じゃいのう。
 お 弓 どうした一訳か一知らぬけど、ワシが三つの時、ばばさまに預けておいてどこへ
 やら行かしゃんしたげな。それでワシひとり、ほうほうと西国するのでござりま
 する。
 妙 珍 なんじゃ、三つの時にババさんに預けておいて、どこへ行つたとは、こんなかわ
 いい子をババさんに預けておいて出て行くとは (大声で) 妙天さんこの子の親は
 人間やおまへんで。
 妙 天 ホンマヤホンマヤ。こりゃ人間やない。鬼や、鬼やで！
 妙 珍 ソーヤ、スッポン！
 妙 天 亀の子
 妙 珍 ドジョウ、ナマズ、エーイ、いっそのこと・・・
 <走って出て行こうとする>
 妙 天 ア、コレ妙珍さん、あんた血相かえてどこへ行くのや
 妙 珍 ドーコーへ！行くとは知れたこと、これから阿波の徳島へのりこんで、
 この子の親にくらいついてやりますのや
 妙 天 妙珍さん、はやる気持ちも分かるけど、アンタ、この子の親の名をご存知かえ。
 所はえ一、よしまた分かったとしても、この子の親が安閑として待っていましょ
 うか。 そこに心のつかざるとは まだ了見がく拍子木>、あまい、あま一
 い！
 妙 珍 それじゃとゆうて・・・
 妙 天 せいた清兵衛、3日目に死んだ。ひとまずこの場は一、帰って来なはれ。
 妙 珍 妙天さん、どうしよう
 妙 天 もっともじゃ
 妙珍・妙天 どうしよう もっともじゃ <妙天・妙珍 繰り返し>
 妙 天 どうしようぞいなあ、もっともじゃわいなあ。こんなところで芝居しよる場合や
 おまへん。妙珍さん、この子の親の名を聞いてみなはれ。
 妙 珍 そうですな、これこれ巡礼の子、そなたのとどさんの名は何というぞいな？
 おつる アーイー とどさんの名は阿波の十郎兵衛。
 妙 珍 してして、かかさんの名は？
 おつる アーイー、お弓と一申します。
 浄瑠璃 <聞いて びっくり>
 お 弓 何と言やる。とどさんの名は阿波の十郎兵衛、かかさんはお弓。三つのとき バ
 ばさんに預けられていたとはいえ・・・
 浄瑠璃 <見れば見るほど 幼な顔 見覚えある額のホクロ ヤレ 我が子とか懐かしや
 と言わんとせしが> (お弓、キセルを落とす)
 妙 天 お弓さん、キセル
 お 弓 オーキニ
 浄瑠璃 <まて しばし。夫婦は今も 取られる命 親子と言え ば この子 どんな憂き
 目がかかるやら。名乗らでこのまま帰さんと 心しずめ よそよそしく>
 お 弓 年はもいかぬに お二人さん 不憫なことでござんすな
 妙 天 ソーデッシャロ かわいそうな子だすな。
 妙 珍 妙天さん、妙天さん！
 妙 天 なんじゃいな。
 妙 珍 アノナ、あの子がさっき、かかさんの名はお弓と言うとつたなあ。お弓ゆうたら
 (お弓を指さして) ソレソレソレ・・・
 妙 天 お弓さん、アーノ、ちょっとお尋ねいたしますけど、さっきあの子が、か

妙 珍 かさんの名はお弓と言うとりましたんやけど、あんたもお弓さん、前に徳島生まれと聞いたことがありますのやけど、徳島のお弓さん、ひょっとしてあの子、(強く) あんたの子では？
 お 弓 マア、なにを言わんすぞいなあ。なるほど、わたしの生まれも阿波の徳島名もお弓ともうします。しかし阿波の徳島と言うてもひろうござんす。また、お弓とゆう名もたんとあること。それにあの子のととさんの名は十郎兵衛、(大きく) 私の夫は銀十郎。それに、私は「生まず」でござんす。
 妙 天 それみなはれ、わたしは聞きどうない聞きどうないゆうのに、聞きなはれ聞きなはれ。恥かいたやおまへんかいな。あの子、ととさんの名は十郎兵衛、私の夫は銀十郎。それに「生まず」や言うてはるやないかいな。「生まず」の人に子があるかいな。
 妙 珍 そりゃそうじゃなあ・・・
 妙 天 もうそんなこと、どうでもええがな。早うお大師さんにお参りしましよ
 妙 珍 ソーヤ、お大師さん、すっかり忘れとったわ。
 妙 天 お弓さん、わたしら、もう日が高こうなりましたことやし、大師さんにお参りしましょうか。
 お 弓 アイ、お二人さん、わたしはあの巡礼の子ともう少し話をして参じます。同じ徳島といえばなつかしい。国のようすも知りたいゆえ、ど一ぞ、お二人さん、お先きに参詣して下しゃんせ。私もあとから参じます。
 妙 天 そら、そうですね。妙珍さん、そんならお参りしましょうか。
 妙 珍 ソウですな、お弓さん、おさきに。
 妙 天 妙天さん妙天さん。
 妙 天 なんじゃな。
 妙 珍 あの子の国はどこやったかいな。
 抄 天 国かいな。国は米の国やがな。
 妙 珍 こめ？
 妙 天 イヤ、麦？
 妙 珍 むぎ？
 妙 天 いや、ひえ。エート (考える) 米やのうて、麦やのうて、粟あわ・・・
 ソーヤ、あわの国や。
 妙 珍 ソーヤ、あわの国や。ととさんの名はなんやったかいな
 妙 天 もう、もの忘れのはやい人や。七郎兵衛や。
 妙 珍 七郎兵衛？
 妙 天 イヤ、八郎兵衛？ 九郎兵衛やのうて、十郎兵衛。ソーヤ、十郎兵衛。
 妙 珍 十郎兵衛、十郎兵衛、国が阿波で、ととさんの名が十郎兵衛。
 妙 天 国が阿波。
 妙 珍 ととさんが、十郎兵衛。
 妙 天 国が阿波。
 妙 珍 ととさんが、十郎兵衛。(続けて3回くらい繰り返す)
 妙 天 あわ十に、いんではこの胸が・・・
 妙 珍 すまアぬ、妙天さん。
 妙 天 妙珍さん。
 妙 珍 水たまり。。
 妙 天 はばかりさん (ピョンとどぶ)
 妙 珍 さあ (傘をひろげて) 行きましよう行きましよう行きましよう。
 (二人、入る)
 浄瑠璃 <お弓はあとをうちみやり>
 お 弓 これ、そな子、ここへおじゃ。
 おつる アイ。
 (お弓、ゴザをもってきて敷く)

- お 弓 ここへおじゃ、ここへおじゃ、ここへ腰を下ろすのじゃ。さぞかし足の痛いこと
 であろう（足をさする）
 年はいかぬに、はるばると、よう訪ねてきやしゃんしたのう。その親た
 ちが聞いてなら、さぞ嬉しゅうてさぞ嬉しゅうて、飛び立つようであろう
 かの。ままならぬが、世のうきふし。可愛い子をふり捨て、国を立ち退く親ごの
 心。よくよくのことであろうほどに、むごい親じゃと必ずかならず恨まぬがよい
 ぞえ。
- おつる イエイエーもったいないー、なんのうらみましようー
 恨むることはなけれどもー小さいときに別れたればーととさんやーかかさんの顔
 もおぼえざーよその子供衆がーかかさんに髪結うてもろたり・・
- 浄瑠璃 <夜は抱かれて寝やしゃんすを見ると・・・>
 おつる わしもかかさんがあるのならー、あのようにー、髪結うてもらうものー。
 それが・・・
- 浄瑠璃 <うらやましゅうございます。ないじゃくりするいじらしさ。母は心も消え入る
 思い・・・>
- お 弓 さてもさても、世の中に、親となり子と生まれるほど、深い縁はなけれどもなあ。
 親が死んだり、子が先立ったり、思うようにならぬが浮き世。こなたがどれほど
 たずねても、会われぬときは詮ないこと。もうたずねずと、国へいんだがよいぞ
 え
- おつる イエイエー、たとえいつまでかかっても、たずねようと思うけれど、悲しいこと
 は一人旅じゃて、どこの宿にも泊めてはくれず、野に寝たり、山に寝たり、人の
 軒の下に寝ては、叩かれたり・・・こわいことや、悲しいこと、ととさんやかか
 さんと一緒なら、こんな目に遭うまいもの。どこにどうしていやさやんす。会いた
 いことじゃ、会いたいわいなあー。
- 浄瑠璃 <ワーと泣き出す娘より、見る母はたまりかね、いっそ打ち明け名乗ろうか。イ
 ヤイヤ、それではこの子も同じ罪。マア、ちょっと抱きたい・・・>
- お 弓 どうしようーなー
 浄瑠璃 <百千いろの憂き思い、二つの目には玉光、天を・・・泣き入ったる。氣を
 取り直し、そばにより・・・>
- お 弓 最前からその様子を聞き、我が身のように思われて、言うに言われぬことながら、
 まめでさえいやったら、また会われぬものでもない。もうもう思いあきらめて、
 早う国へ帰るがよいぞえ。
- 浄瑠璃 <なだめすかせば 聞き分けて>
 おつる おまえがそのように言うて、泣いて下さりますよって、どうやらかかさんのよう
 に思われて、わしゃ、ここがいにともない。モーシ、お家さま、どんなことでも
 いたします。おまえのそばに、いつまでもわたしを置いてくださりませ。頼みま
 す。拝みます。
- 浄瑠璃 <拝みますると手を合わす。母は心も消え入る思い・・・>
- お 弓 また、そのように悲しいことを言い出して、またこのおばを泣かすのかいのう。
 ホンニマア、私としたことが。待ちゃ、待ちゃ、待ちゃ・・・
- 浄瑠璃 <言いつつ取り出すキンチャクの、そこを探して豆板の、豆なお喜ぶはなむけど、
 紙に包んで差しい出す>
- お 弓 なんぼ一人旅じゃとて、金あらばどこの宿でも泊めてはくれる。野に寝たり、山
 に寝たりして、わずろうてはしてたもんんな。や、や、サササ、これを持って行
 きやいのう
- 浄瑠璃 <渡せばおつるは、差し戻し>
 おつる ありがとうございます。けれど、金は小判というものを、たんど持っております。
 もうさんじます。
- お 弓 まあ、そうであろうが、これはおばのこころざし。
 浄瑠璃 <無理に持たして 塵うち払い・・・おりから帰る 二人連れ>

妙 珍 マア、お弓さん、まだ居やはったんだすかいな。 マア、この子もまだ居てるわ。
 妙 天 お弓さん、泣いてはるようやが、どないしはったんや。
 お 弓 ハイ、アノ、実はなあ。あの巡礼の子と、よもやま話をし、可哀そうな身の上話を聞き、ついほだされて、私が泣けばあの子も泣き、私が、私が泣けばあの子も泣き、つい、もらい泣きしましたワイなー。
 妙 天 ア、そうですか。そいやまあ、ヨ一泣いてやりましたなあ。
 おつる さようなれば、お家さま、もうおいとまいたします。
 お 弓 もう行きるかや。
 おつる ど一せ、いなずばなりますばい。
 お 弓 行かしもない。
 おつる いにともない。
 お 弓 名残がおいしい。まいちど、顔をコーレ。
 おつる アーイ。
 浄瑠璃 <引き寄せて、見れば見るほど胸せまり、離れがたなき、うき思い
 妙 珍 そーれ……。知らねど、誠の血筋、名残惜しげに、振り返り、振り返り、どこをどうしてたずねたら >
 おつる とどさんや、かかさんに……。
 浄瑠璃 <会われることぞ、会わしてたべ……。>
 おつる 南無大悲の観音さま
 浄瑠璃 <ちちははの、恵みも深き、粉河寺>
 おつる ア-----
 浄瑠璃 <泣く泣く別れ……。>
 (おつる、道に入る。うちより「喧嘩じゃ 喧嘩じゃ 喧嘩じゃ」)
 妙 珍 アイタ……。一体何が起こったんじやいのう。ホンマに、アーこわ。こんな所に長居は無用。はよう帰りましょう。
 エート、アリヤ? 妙天さんの姿がない。妙天さん、妙天さーん。
 妙 天 妙珍さーん。
 妙 珍 妙天さーん、一体どこに居るんやいな。妙天さーん。
 妙 天 妙珍さーん、ここやここや。
 妙 珍 ここやここや言うても、分からしまへんがな。声はすれども姿は見えず、ホンニお前は、へのような。
 妙 天 何をアホなこと言わんと。ここですがな。
 妙 珍 何をしてはるんや。ササ、早うこっちへ来なはれ。ドッコイショ、ササ、早うこんな怖いところにいつまでもおらんと、早う帰りましょう。
 妙 天 早う帰ろうと言うても、妙珍さん。ワテ腰が抜けてしもうて、動かれしまへんがな。
 妙 珍 動かれへん言うたて、どないしまんねや。
 妙 天 連れて帰っとくんははれ。 アンタ、おおてえな。
 妙 珍 アホなこと言わんとき。そんな家までも、負うて帰れるかいな。
 妙 天 それやったら、カゴ呼んで、カゴ呼んで……。
 妙 珍 アホなこと、こんなところにカゴなんかあるかいな。
 妙 天 ドナイショー。そうや、妙天さん、ちょっと待っとってや。
 (車をこしらえる)
 妙 珍 サア 妙天さん、これに乗って帰りましょう。
 妙 天 妙珍さん、アンタ、なかなかエエ頭してはりますなあ。
 妙 珍 何言うてますのや、妙天さん。どこへ行きましよ。
 妙 天 妙珍さん、頼みがありますのや。
 妙 珍 なんや、頼みとは。
 妙 天 実はな (アドリブで公演先の地名など) へやってんか。
 妙 珍 なんや () へか?
 妙 天 そーや () でな、今年の芝居で「阿波の鳴門・どん

どろ大師・お弓おつるの場」いうて、悲しい芝居をしてますのや。なかなかエエ芝居だっせ。それ見とうおますのや。()へ連れて行ってえな。

妙 珍

ソーカ、そんならワテも、一緒に見に行きまっさ。

妙 天

妙天さん()やな。しっかりつかまっとなはれや。

妙 珍

分かってま。

行きまっせ、ソレーツ。

(野崎で入る)

浄瑠璃

<おつるのあと、見送り見送り、伸び上がり・・・>

お 弓

コレ、むすめ。ま、ちょっとこちらを向いてたも。これが一世の別れかいのう。せっかくながの海山越え、艱難して、あこがれ訪ねるいとし子に

浄瑠璃

<名乗らでいなす、母が気はどうであろう。狂気半分、半分は……。>

お 弓

死んで……っ(泣く)

浄瑠璃

<いるわいの。まだ、おいさきのある子をば、親ゆえ路頭に立たすかと、そのままそこに、どうと伏し、消え入るばかり、嘆きしが、起きあがって涙をはらい……>
イヤイヤ、どう思いあきらめても、今別れては、また会うことはならぬ身の上。(大きな声で)たとえ難儀がかからばかかれ。またその時は、夫の思案ほどはいくまい。追いついて、連れ戻そう。オオそうじゃ、そうじゃー

お 弓

浄瑠璃

<そうじゃそうじゃと子に迷う、道は親子の別れ道。あとを慕うて・・・エ……>

お 弓

おつるヤーイ

浄瑠璃

<エ……たずね行く>

(幕)



中町北小学校歌舞伎クラブ

